新刊紹介

大山　喬平 著
『日本のムラと神々』

熊谷隆之

本書は、日本中世史研究の泰斗であり、『富山県史』執筆にも関わられた著者の、一六篇の論考を収録した論文集である。目次を示す（副題は、割愛した）。

序章　ムラの歴史を考える
第1章　ムラの持続性について
一　風土記のムラ
二　古代伊豆のサトとムラ
三　野田村木簡考
四　重源狭山池改修碑について
五　俊乗房重源の宗教的経済活動
六　葛野大堰と今井用水
第2章　ムラの神さま（敷きます神）の発見
一　賀茂　日本の神と歴史学
二　村の神さま
三　中世阿蘇の神々と村々
四　ムラを忘れた歴史学
第3章　中世の在地社会を考える
一　荘園制
二　多様性としての列島一四世紀
三　鎌倉初期の郷と村
四　越中の庄・郷・村
五　田舎の法は残酷か
六　中世人は裁判で何を争ったか
終章　ムラの新たな研究のために

第3章一「荘園制」は、越中国石黒荘弘瀬郷を主たる分析対象とし、荘園を政治、村落を生活のユニットとして把握した、著名な岩波講座論文。「日本中世の荘園には臍があった」の寸言は、いまなお鮮烈である。

また、第3章四「越中の庄・郷・村」は、八～一六世紀の文献史料における郷・村地名の初見を収集・分析した、本誌掲載論文。中世という枠をこえ、古代から現代にいたる越中の地域構成を考えるうえで、不可欠の論考である。

もとより、本書のフィールドは、越中にとどまらぬ。越中のもつ特色を、他地域との類似・相違のなかで追究するという意味で、本書が取りあげる、さまざまな地域の位相にふれてみるのは、いかが。関心のある時代や地域を問わず、座右におかれることをお勧めする。

（岩波書店、二〇一二年三月刊、五六四頁、本体一二、〇〇〇円）